

## 「満州事件費」はどのように使われたか(2)

平井 廣一

### 目次

はじめに

- I 第2師団の「満州事件費」
- II 朝鮮軍・第19師団・第20師団の「満州事件費」

まとめ

### 【要旨】

1931年9月に満州事変が勃発した時、前年4月に日本から派遣されていた第2師団が関東軍の指揮下に中国軍と戦闘を開始し、奉天・長春・齊々哈爾・錦州・哈爾濱等「満州」の主要都市を次々と占領した。さらに関東軍を支援するために朝鮮軍も早々と越境出兵を行なった。こうした日本本土・植民地からの駐箚・派遣部隊によって満州事変は進展し、各軍は巨額の満州事件費を計上した。本稿では、前稿の関東軍に続いて、第2師団、朝鮮軍、第19、第20師団の満州事件費の内容を検討し、賄費や請負賄費等の糧秣費と荷馬車や自動車等の借上費等、食糧費と部隊の移動費用が大部分を占めていることを明らかにした。

### はじめに

1931年9月、満州事変の勃発とともに、関東軍は巨額の軍事費を「満州事件費」として申請、認可された。この満州事件費は、1931(昭和6)年度の追加予算額では650万円にすぎなかったが、翌32(昭和7)年度になると一挙に1億8300万円に急膨張し、33年度には1億450万円、34年度は1億3300万円と1億円を下回ることはなかった。またこうした巨額の事件費は、1931～34年度の陸軍省一般会計予算の34%、45.7%、32.6%、29.5%にも上っていた。

そこで本稿では、前稿に続いてこうした巨額の事件費の内訳を検討する。前稿では、軍事行動の主体であった関東軍が用いた事件費を分析したので、本稿では満州事変勃発当時に満州に駐箚していた第2師団と朝鮮から派

遣された第19及び第20師団が計上した事件費の内容を分析することにする。

### I 第2師団の「満州事件費」

第2師団(衛戍地：仙台)は、1931(昭和6)年4月に満州に派遣された(派遣時の師団長は多門二郎)。満州駐箚部隊の編成は表1、日本に残った留守部隊の編成は表2の通りである。まず、駐箚部隊(表1)は、遼陽に置かれた司令部が、歩兵部隊として第3、第15の2個旅団(その兵員数は第3旅団=2個連隊2163人、第15旅団=2個連隊2163人の計4326人、各連隊に機関銃隊を含む)に加えて、騎兵1個連隊(騎兵連隊26人+騎兵1個中隊162人の計188人)、野砲兵1個連隊(野砲兵連隊41人+野砲兵大隊8人+野砲兵中隊628人の計677人)、工兵1個中隊(162人)を

キーワード：満州事変、第2師団、朝鮮軍

表1 第2師団満州駐節部隊 編成表

第2師団司令部 (師団長：多門二郎)	遼陽	参謀部 副官部 経理部 軍医部 獣医部 法務部 司令部付						
歩兵第3旅団司令部	長春	歩兵第4連隊	長春	連隊本部	第1・第2大隊	第1～第3・第5～第7中隊		機関銃隊
		歩兵第29連隊	奉天	連隊本部	第1・第2大隊	第1～第3・第5～第7中隊		機関銃隊
歩兵第15旅団司令部	遼陽	歩兵第16連隊	遼陽	連隊本部	第2・第3大隊	第5～第7・第9～第11中隊		機関銃隊
		歩兵第30連隊	旅順	連隊本部	第1・第2大隊	第1～第3・第5～第7中隊		機関銃隊
騎兵第2連隊	公主嶺			連隊本部		第1中隊		
野砲兵第2連隊	海城			連隊本部	第1・第2大隊	第1・第2・第4・第5中隊		
工兵第2大隊	鉄嶺				第2中隊			

出所：「満州駐節第二師団將校同相当官高等文官職員表 (昭和6年8月15日調)」(C13070913900)

表2 第2師団留守部隊編成表

司令部留守部 (司令官：安田郷輔)	仙台					
歩兵第4連隊留守隊	仙台	留守隊本部	第3大隊	第9～第11中隊	学校服務	
歩兵第29連隊留守隊	若松	留守隊本部	第3大隊	第9～第11中隊	学校服務	
歩兵第16連隊留守隊	新発田	留守隊本部	第1大隊	第1～第3中隊	学校服務	
歩兵第30連隊留守隊	高田	留守隊本部	第3大隊	第9～第11中隊	学校服務	
騎兵第2連隊留守隊	仙台	留守隊本部		第2中隊	学校服務	
野砲兵第2連隊留守隊	仙台	留守隊本部	第3大隊	第7・第8中隊	学校服務	
工兵第2大隊	仙台	大隊本部		第1・第3中隊	学校服務	
独立山砲兵第1連隊	高田	連隊本部	第1・第2大隊	第1～第4中隊	学校服務	
輜重兵第2大隊	仙台	大隊本部		第1・第2中隊	学校服務	
衛戍病院	仙台・若松・新発田・高田					
演習場主管						
管内関係官衙学校 仙台憲兵隊 仙台陸軍教導学校 軍馬補充部白河支部 員外学生	仙台 仙台 西白河郡西郷村	学校本部	学生隊本部	第1～第4中隊	機関銃隊	

出所：「第二師団内地部隊將校同相当官高等文官職員表 昭和7年8月8日調」(C13070914100)

指揮し、長春、奉天、遼陽、旅順に各歩兵連隊の本部を置いていた<sup>(1)</sup>。また各歩兵連隊に機関銃隊を配置していた。これらの4連隊のうち、奉天の第29連隊が、事変勃発と同時に関東軍とともに中国軍を攻撃することになる。

表2の留守部隊は、満州に駐節する各歩兵連隊の留守隊本部と騎兵第2大隊、野砲兵第2連隊、及び工兵第2大隊の留守隊がそれぞれの衛戍地に置かれていた他、独立山砲兵第1連隊、輜重兵第2大隊が満州に駐節せずに残っていた。また仙台、若松、高田、新発田の連隊所在地には衛戍病院が置かれていた。

これらの駐節部隊と留守部隊の兵員数を比較すると、各歩兵連隊とも2個大隊を駐節させて残りの1個大隊を留守預かりとし、騎兵第2連隊は各1個中隊を駐節と留守預かりに

それぞれ分けている。また野砲兵第2連隊は、歩兵連隊と同様に2個大隊を満州に送り、残り1個大隊が留守部隊に、工兵第2大隊は1個中隊を満州に派遣し、残り2個中隊を留守預かりとしている。従って、第2師団は歩兵部隊と野砲兵連隊はその3分の2を、騎兵連隊は半数を、工兵大隊はその3分の1を満州に送ったことになる。

ここで、満州事変から約1カ月後の1931年10月下旬に満州に派遣されていた第2師団の装備を示すと<sup>(2)</sup>、1歩兵連隊(2大隊と歩兵砲1隊、1大隊は歩兵3中隊と機関銃1中隊)は、軽機関銃90挺(うち18挺は押収品、1中隊15挺)、重機関銃20挺(うち8挺は押収品、1機関銃中隊10挺)、擲弾筒18挺(1中隊3挺)、曳火手榴弾600発(1中隊100発)、平射歩兵砲2門、曲射歩兵砲4門、山砲2門(第16、第30連隊のみ装備、2門とも押収品)、

同弾薬200発（上記の2連隊のみ装備、すべて押収品）となっていた。

また騎兵連隊（2中隊）は、軽機5挺（うち3挺は押収品）、重機2挺（押収品）、野砲兵連隊（2大隊=4中隊）は野砲16門（1中隊4門）、軽機9挺（押収品）、重機1挺（押収品）を装備し、駐劄第2師団全体では軽機374挺、重機83挺、擲弾筒72挺、曳火手榴弾2400発、平射歩兵砲8門、曲射歩兵砲16門、野砲16門、山砲4門を数えた。主要装備である機関銃等では、張学良軍から押収した兵器がある程度の量に達しているのが注目される。またこの調査には、刀・銃剣と38式歩兵銃・44式騎兵銃、及び弾薬類は含まれていない。

このように、第2師団はその兵力の約3分の2を満州に駐劄させ、主として機関銃と野山砲によって張学良軍をはじめとする中国軍<sup>(3)</sup>と戦ったが、事変勃発後から帰還までの行動は概ね以下のものであった<sup>(4)</sup>。

9月18日夜、事変が勃発すると、師団は翌19日には奉天を占領し、この間師団の一部は寛城子、南嶺（いずれも長春）を占領した。次いで9月20日には長春に兵力を集中し、翌21日は吉林省の在留邦人の保護を目的にその主力を吉林に差し向けた。その後約1旅団を同地に残して残余の兵力は長春に帰還した。

一方、洮昂線方面には馬占山軍と張海鵬軍が嫩江をはさんで対峙していたが、馬軍が同江の鉄橋を破壊、関東軍はその修理に着手させようとしたが、馬軍はそれを妨害したため、軍は第2師団に馬軍の撃退を命令、11月18日払暁から攻撃を開始し、19日には齊々哈爾を占領した。なおこの戦闘においては、師団は数百名の凍傷患者を出している。

この間、奉天を追われた張学良軍は、抗日義勇軍を組織しながら錦州に新政府を設置して関東軍に抵抗、4万の軍隊を錦州に集結させた。第2師団は関東軍の命令により11月下旬から齊々哈爾附近の警備を第3旅団長の指揮する部隊に任せ、主力を原駐屯地に帰還さ

せて錦州攻撃の準備を行なった。12月下旬には、師団の主力は遼河を渡り錦州攻略戦に備えたが、関東軍の命令で第20師団と交代して1月下旬には再度駐屯地に帰還した。

翌1932年1月下旬、丁超、李杜の率いる吉林軍が反旗を翻して哈爾濱在住邦人の安全が脅かされたため、関東軍は長春の長谷部旅団を哈爾濱に急派するとともに、第2師団も急遽長春に兵力を集中し、2月1日より自動車と鉄道によって北進を開始、4日から戦闘を開始したが容易に進捗せず、5日早朝新たに到着した歩兵第16連隊を交えて攻撃を再開、5日正午過ぎに哈爾濱を陥落させた。

次いで師団は兵力を哈爾濱に集中して同地の警備を担当していたが、東支鉄道東線方面の治安は依然として不安定で、部隊の一部を沿線に派遣した。しかし敗退した反吉林軍は再度哈爾濱を襲撃せんとしたためにこれを撃破する作戦を敢行、3月下旬から行動を起こして吉林軍を支援しつつ攻撃を加え、4月上旬には方正付近にまで進出した。この攻撃によって反吉林軍は依蘭まで退却したので、師団は吉林軍と飛行隊によってこれを追撃して4月13日に哈爾濱に帰還した。

さらに師団は、哈爾濱の警備を第10師団（姫路）と交代するとともに、関東軍の直轄として第3、第15旅団長の指揮する各歩兵1個連隊を齊々哈爾及び吉長方面の警備に就かせ、4月下旬にその主力を原駐屯地に帰還させて南満方面の警備を行なわせた。

1932年4月下旬といえば、すでに満州国が成立していたが、吉林・敦化方面の治安は依然として不安定で、第2師団は5月上旬に再度吉林方面に派遣され、約半年間にわたって同地方と鉄道沿線の警備や諸鉄道の保護、新線建設工事の警護を担った。またこれ以降、師団の警備地区は南満州一帯に拡張され、10月には一部の部隊は関東軍の東遼道討伐に参加した後、引き続いて同地方に駐兵して治安維持に当り、瀋海線の保護も担当した。

同年11月中旬になると、師団の一部は吉林・新京・奉天・海龍地区における関東軍独立守備隊による反満抗日軍討伐に協力し、12月中旬には満鉄本線と安奉線に囲まれた三角地帯の討伐を実施したが、その最中に衛戍地帰還の命令を受けた。そして任務を独立守備隊と新たに満州に到着した第6師団(熊本)に任せて33年1月下旬に全ての部隊が仙台に帰還した。

こうして第2師団は満州での任務を終えたが、この間、300名の戦死者と約700名の戦傷者、そして約800名の凍傷者を出した。

このような戦闘を踏まえて、第2師団は満州事件費をどのように使用したのかを見よう。表3によれば、1931年12月分の総額は約21万円、32年2・3月は2カ月で約44万円であるから、1カ月は22万円となる。4・5月は俸給を28万円計上しているために75万円に跳ね上がり、1カ月約38万円とそれまでの倍額となっているが、俸給を差し引くと約24万円になる。その後は、帰還する1933年1月まで約20万円程度を支出しているが、同年4月以降

は10万円以下と激減する。したがって第2師団は概ね1カ月20万円を事件費として計上しているとみるのが妥当であろう。ちなみに、この20万円という金額は、関東軍の同月の満州事件費認可額35万円<sup>(5)</sup>の約60%である。

さらに第2師団の計上した満州事件費を財政年度ごとにまとめてその総額を推計し、事件費総額に占める比率を算出すると、1931年度は、同年12月分約21万円(表3)を事変勃発の9月から翌32年3月までの6カ月分とすると126万円となり、同年度満州事変費追加予算額656万円の19.2%となる(決算額では総額4848万円の2.6%)。

翌32年度では、資料が欠けている33年2月～3月分をその前の32年12月・33年1月分と同額の38万4千円とすると、32年4月分から33年3月分までの32年度総額は286万円となり、事件費予算総額の1億8313万円の1.6%(決算額では総額1億8598万円の1.5%)となる。

次にその内訳をみると、全ての月で糧秣費と運輸費が突出しており(表3)、その他で

表3 第2師団 満州事件費所要額

(円)

	1931年12月分	1932年2・3月分	1932年4・5月分	1932年6・7月分	1932年8・9月分	1932年10・11月分	1932年12月・33年1月分	1933年4月～6月分	1933年度(34年1月分まで)	34年度(35年1月～3月分)	35年度(7月～9月分)	36年度(7月～9月分)
俸給	17,771 (8.5)	38,786 (8.9)	284,613 (38.0)	-	-	-	-	-	-	-	-	-
商品費	11,016 (5.3)	45,892 (10.5)	25,299 (3.4)	25,422 (5.5)	32,556 (6.6)	38,171 (9.6)	51,068 (13.3)	3,300 (16.5)	5,187	4,508	410	703
郵便電信費	1,464 (0.7)	3,075 (0.7)	2,744 (0.4)	3,232 (0.7)	2,118 (0.4)	1,835 (0.5)	2,382 (0.6)	1,600 (8.0)	3,400	1,860	-	-
糧秣費	55,900 (26.6)	159,901 (36.6)	186,685 (24.9)	159,760 (34.8)	158,432 (32.0)	132,290 (33.4)	150,710 (39.2)	2,000 (10.0)	5,652	9,100	1,190	1,599
被服費	-	1,765 (0.4)	1,863 (0.2)	2,571 (0.6)	3,135 (0.6)	2,214 (0.6)	2,025 (0.5)	6,791 (33.9)	470	197	-	-
兵器費	8,224 (3.9)	6,835 (1.6)	4,480 (0.6)	16,356 (3.6)	8,728 (1.8)	8,425 (2.1)	6,857 (1.8)	-	49,800	840	-	-
馬匹費	500 (0.2)	3,949 (0.9)	1,307 (0.2)	1,263 (0.3)	2,627 (0.5)	645 (0.2)	1,240 (0.3)	-	6,441	1,125	-	-
演習費	-	-	1,152 (0.2)	732 (0.2)	414 (0.1)	1,820 (0.5)	100 (0.0)	-	-	-	-	-
忠告費	-	-	-	-	400 (0.1)	-	7 (0.0)	1,800 (9.0)	3,350	2,411	551	938
運輸費	14,109 (6.7)	51,724 (11.8)	116,233 (15.5)	141,199 (30.8)	160,619 (32.5)	74,514 (18.8)	86,979 (22.6)	50 (0.2)	630	1,870	1	0
築造費	3,094 (1.5)	10,304 (2.4)	16,280 (2.2)	32,240 (7.0)	69,698 (14.1)	55,907 (14.1)	12,308 (3.2)	-	-	443	-	-
旅費	-	9,921 (2.3)	11,293 (1.5)	6,810 (1.5)	735 (0.1)	1,705 (0.4)	3,275 (0.9)	2,000 (10.0)	2,306	9,710	685	1,048
備給	8,766 (4.2)	19,740 (4.5)	23,048 (3.1)	30,757 (6.7)	33,939 (6.9)	45,420 (11.5)	27,861 (7.3)	2,280 (11.4)	8,158	956	-	-
諸手当	-	-	840 (0.1)	102 (0.0)	-	4,020 (1.0)	2,180 (0.6)	-	-	-	-	-
雑費	85,936 (41.0)	85,509 (19.5)	72,032 (9.6)	38,083 (8.3)	31,291 (6.3)	29,093 (7.3)	37,056 (9.6)	200 (1.0)	600	1,479	6	1
機密費	2,000 (1.0)	-	-	-	600 (1.479)	6	1	-	-	-	-	-
計	209,785 (100.0)	437,406 (100.0)	749,869 (100.0)	458,527 (100.0)	494,682 (100.0)	396,057 (100.0)	384,048 (100.0)	20,021 (100.0)	85,976	34,537	2,849	4,270

出所：31年12月分は「時局経費使用ノ件」(C04011136800)、1931年度(2・3月分)は「時局ノ為特ニ要スル経費使用ノ件」(C04011202100)

その他は「満州事件費使用ノ件」(32年度4・5月分=C04011296700、6・7月分=C04011397600、8・9月分=C04011400800、10・11月分=C04011451300、12・1月分=C04011528400、33年度4月～6月分=C04011634100、33年度(34年度1月分まで)=C04011799100)

34年度(35年1月～3月)=C04012145100、35年度(7月～9月分)=C04012240700、36年度(7月～9月分)=C04012439500

(備考)

①31年12月分及び32年2・3月分の計は経常費と臨時費の合計額で、雑費には諸支出金を含む。

②35年1～3月分(34年度)の合計34,537円には、給与33円を含む。

「満州事件費」はどのように使われたか(2)

表4 第2師団 糧秣費内訳 (1932年2・3月～33年1月分)

(円)

	1932年2・3月分		4月分		6・7月分	
師団司令部	請負給・糧秣費	10,500	請負給・加給品	5,358	請負給・加給品	7,880
歩兵第3旅団司令部	請負給	1,889	請負給	750	請負給	1,800
歩兵第15旅団司令部	膳料・問食・加給品	3,395	膳料・加給品	3,654	請負給・加給品・燕麦・干草	10,280
歩兵第4連隊	副食物・加給品代・温浴用燃料代	24,000	副食物・加給品	18,125	副食物及び燃料代・加給品・糧秣現地調査	22,620
歩兵第29連隊	部隊自炊・請負給・加給品・弁当	24,636	部隊自炊・請負給・加給品・弁当給食	15,872	部隊自炊・鉄道輸送問弁当・加給品	29,050
歩兵第16連隊	膳料・加給品(清酒・煙草)・臨時飲食物	32,615	膳料・臨時飲食物・加給品	16,755	膳料・臨時飲食物・鉄道輸送問弁当代・加給品	38,884
歩兵第30連隊	膳料・馬糧	30,298	膳料・馬糧	16,522	膳料・馬糧・加給品・増給	21,135
野砲兵第2連隊	膳料	14,828	膳料	7,316	膳料	14,020
工兵第2大隊第2中隊	膳料・加給品・馬糧	4,146	膳料・加給品	2,405	膳料	3,500
通信隊	部隊自炊・膳料・請負給	5,037	請負給・加給品	3,330	請負給代・加給品代	6,592
哈爾濱兵站部	請負給・加給品代	464	請負給・加給品	792		-
騎兵第2連隊	糧秣費	8,088		-		-
經理部		-	高粱・干草・藁	400		-
計		159,896		91,279		155,761

  

	8・9月分		10・11月分		12・1月分	
師団司令部	請負給・加給品	6,880	請負給・加給品	6,360	請負給・加給品・部隊自炊膳料	7,258
歩兵第3旅団司令部	請負給	2,658	請負給	2,934	請負給(司令部給食)	1,860
歩兵第15旅団司令部	請負給・加給品	5,025	請負給・加給品・増給品	6,225	請負給・加給品代・増給代	3,755
歩兵第4連隊	副食物及び燃料代・加給品・請負給	26,900	副食物及び燃料代・夜間勤務者夜食等	21,619	副食物及び燃料代・夜間勤務者夜食代・請負給	23,646
歩兵第29連隊	部隊自炊・鉄道輸送問弁当	26,676	部隊自炊・鉄道輸送問弁当等	26,676	部隊自炊・鉄道輸送問弁当・夜間勤務者夜食	26,276
歩兵第16連隊	膳料・臨時飲食代・輸送問弁当代等	37,067	膳料・増給・輸送問弁当代・粟稗	29,996	膳料・増給代・輸送問弁当代	33,398
歩兵第30連隊	膳料・馬糧・加給品・増給	2,200	膳料・馬糧	12,940	膳料・馬糧	8,494
野砲兵第2連隊	膳料	16,000	膳料・馬糧	16,000	膳料・弁当代・増給代	16,900
工兵第2大隊第2中隊	膳料	1,760	膳料	1,200	膳料・加給品	3,905
通信隊	請負給・増給品代	5,394	膳料・増給品代	1,530	請負給・増給品代	5,394
哈爾濱兵站部		-		-		-
騎兵第2連隊	膳料	3,891	膳料	3,891	膳料	7,224
經理部		-		-		-
衛生班	膳料・請負給・増給・加給品代	2,708		2,918	膳料・請負給	2,696
乘馬討伐隊		-		-	部隊自炊膳料・馬糧	2,283
計		137,159		132,289		143,089

出所:32年2・3月分=「時局ノ為特ニ要スル経費使用ノ件」(C04011202100), 4月分=「満州事件費使用ノ件」(C04011296700)  
 6・7月分, 8・9月分, 10・11月分, 12・1月分はそれぞれ「満州事件費使用方ノ件」(C04011397600, C04011400800, C04011451300, C04011528400)

表5 第2師団 運輸費内訳 (1931年12月分・1932年2・3・4月分)

(円)

	31年12月分		32年2・3月分		4月分	
司令部	自動車借上代 (10台)				梱包材料・荷札等	117
歩兵第15旅団司令部	馬車借上代 (100台)				借上馬車賃・鉄道賃	1,119
歩兵第4連隊	蓆 (500枚)		荷物運搬車輜 (1カ月1015台)	5,669	荷物運搬馬車・トラック等	5,230
歩兵第29連隊	縄 (200個)		蓆・縄・空箱・馬車賃・自動車賃・汽車賃	992	梱包材料用蓆・縄等	7,722
歩兵第16連隊			荷馬車 (1800輛)	9,900	荷馬車	9,900
歩兵第30連隊			荷馬車賃 (750輛)・梱包材料	3,470	荷馬車・梱包材料等	2,170
野砲兵第2連隊			大行李馬車・梱包費	4,600	大行李馬車・梱包費等	1,850
工兵第2大隊第2中隊			大行李用荷馬車・石炭運賃	1,496	荷馬車等・荷造材料等	1,100
騎兵第2連隊			馬車代	2,972	膳料	3,500
經理部			乗合自動車・乗用自動車・貨物自動車・荷馬車	16,160	糧秣運搬費・乗合自動車・乗用自動車等	27,545
臨時通信隊			荷馬車 (延300台)・客馬車 (延80台)・梱包用蓆	1,285	荷馬車等	607
計		14,109		46,544		57,360

出所:31年12月分=「時局経費使用の件」(C04011136800), 32年2・3月分=「時局ノ為特ニ要スル経費使用の件」(C04011202300)  
 4月分=「満州事件費使用の件」(C04011296700)

(備考)

- 31年12月分の運輸費計14,109円は原資料では総額表示であり、部隊別内訳は不詳。
- 32年2・3月の乗合自動車等16,100円は、原資料で支出部隊が「第2師団」とのみ記されているため、4月分の内訳と合わせて經理部支出とした。
- また、同月の運輸費には帰属先が不明の「運輸費」が1,771円計上されており、これを加えると48,315円となる。表3では同月の運輸費は51,714円であり、3,000円ほどの差がある。
- 31年12月分と32年2・3月分の原資料備考欄には、部隊並びに物件輸送の鉄道運賃は、後払いになっているので満鉄の請求があり次第申請する、とある。

は俸給や需品費、築造費、雑費、備給がある程度の比率を占めているのが目を引く。被服費、兵器費、馬匹費、演習費の比率は極めて低い。

表4は、そのうち32年2月から33年1月に本土に帰還するまでの糧秣費の内訳を示している。同表によれば、糧秣費は司令部、旅団

司令部、歩兵連隊、野砲兵連隊、工兵大隊、通信隊等、部隊ごとに支給され、その額は1カ月平均では約7～9万円である。表3では、師団がまだ中国軍と激しい戦闘を行っていた1931年12月の糧秣費約5万6000円が計上されているが、その内訳は不明なので、表4では32年2月以降の分が示されている。総じて

賄料、請負賄、加給品(清酒・煙草)がほとんどで、連隊はその兵員数が多いので金額も大きい。このうち第29連隊には、自炊費用が支給されている。

またこれらの兵員一人当たりの単価は、32年2・3月では、師団司令部及び第3旅団司令部の請負賄は1円50銭、第4連隊の副食物加給品代は40銭、第29連隊の部隊自炊代は40銭、請負賄は1円50銭、第16連隊の賄料は40銭、第30連隊の賄料は55銭である。

少し時代が下るが、1937年4月の時点では、満鉄連京線、京濱線、安奉線等の比較的市街地の沿線に駐屯する部隊には、一般賄料として一人日額27銭、請負賄料は54銭とその倍額が支給されることになっているが<sup>(6)</sup>、すでに32年2・3月でも請負賄は賄料の3倍であり、単価そのものもこの時期の方が高い。

次に、表5によって部隊別の運輸費の内訳をみると(内訳が判明するのが32年2・3月と4月分しかない)、馬車や荷馬車の借上げ費、バスや自動車等の経費、それに梱包材料が主たる支出である。なお、同表の備考欄にあるように、満鉄による軍隊輸送費はこの中には含まれていない。

第2師団は、先に部隊の動向で触れたように、32年2月の哈爾濱占領後は、同地の警備を第10師団(姫路)と交代して、4月下旬には一部の部隊を除いてそのほとんどは原駐屯地である長春や遼陽に帰還しているから、表5にある馬車賃や自動車代は、これらの部隊の移動のための経費と考えてよからう。

その後、師団は吉林方面の警備を担当したので、そのための部隊の輸送費として6・7月の2カ月で14万円、8・9月で16万円を見積もったが、10月から翌33年1月までは2カ月で7～8万に半減している。それまでのような長距離かつ大規模な移動がなかったからであろう。

以上で、第2師団の申請した満州事件費の二大費目である糧秣費と運輸費の検討を終え

た。要するに、部隊の移動費と食糧費が中心となっていたのであるが、それ以外には通訳、火夫、厨夫、馬丁、運転手、苦力等に備給が支払われているのが目を引く。このうち、苦力の備給については、32年2・3月分として第29連隊が200名に単価30銭で60円を、第16連隊が延1800人に1名当たり1円で1800円を、第30連隊が単価50銭で300人を雇用して150円を支払っている<sup>(7)</sup>。そしてこれらの総額2010円は、同月分の備給費総額1万9740円の10%となる。

## Ⅱ 朝鮮軍・第19師団・第20師団の「満州事件費」

まず、朝鮮軍は表6のように編成されていた。司令部は京城の龍山に置かれ、朝鮮軍司令官は第19師団(羅南=朝鮮・咸鏡北道北部所在)と第20師団(龍山)、及び憲兵隊司令部、軍馬補充部、造兵廠平壤兵器製造所等を率いた。

また羅南と龍山をそれぞれ衛戍地としていた19・20師団には各々2個旅団があり、1個旅団は4歩兵連隊、1騎兵連隊、1野砲兵連隊、1工兵大隊及び衛戍病院を擁していた。さらに各連隊には1機関銃隊が配備されていた他、20師団は飛行第6連隊と重砲兵大隊を率いていた。

この朝鮮軍から部隊を抽出して混成第38旅団と混成第39旅団が編成された。すなわち第38旅団は第19師団の歩兵第73、76連隊、騎兵第27連隊、野砲兵第27連隊、工兵第19大隊等によって(表7)、39旅団は第20師団の歩兵第77、78連隊と騎兵第28連隊、野砲兵第26連隊で編成された(表8)。したがって、朝鮮軍としては第38、第39の各混成旅団を組織するにあたって、第19、20師団からそれぞれ歩兵連隊の半数と騎兵連隊、野砲兵連隊をすべて動員したことになる。

表9は、朝鮮軍が計上した満州事件費であ

「満州事件費」はどのように使われたか(2)

表6 朝鮮軍編成表

朝鮮軍司令部 朝鮮軍軍法会議 鎮海灣要塞司令部 永興灣要塞司令部 朝鮮陸軍倉庫 朝鮮衛戍刑務所	龍山 龍山 鎮海 元山 龍山 龍山							
第19師団司令部	羅南	歩兵第37旅団司令部	咸興	歩兵第73連隊	羅南	第1～第3大隊 第3守備隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊
				歩兵第74連隊	咸興	第1～第3大隊 第4守備隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊
		歩兵第38旅団司令部	羅南	歩兵第75連隊	会寧	第1～第3大隊 第2守備隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊
				歩兵第76連隊	羅南	第1～第3大隊 第1守備隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊
		騎兵第27連隊	羅南			第1～第2中隊		
		野砲兵第25連隊	羅南		第1～第3大隊	第1～第2中隊・第4～第5中隊・第7～第8中隊		
		工兵第19大隊	会寧			第1～第2中隊		
		衛戍病院	羅南・会寧・咸興					
第20師団司令部	龍山	歩兵第39旅団司令部	平壤	歩兵第77連隊	平壤	第1～第3大隊 第1守備隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊
				歩兵第78連隊	龍山	第1～第3大隊 第2守備隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊
				歩兵第79連隊	龍山	第1～第3大隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊
		歩兵第80連隊	大邱	第1～第3大隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	機関銃隊		
		騎兵第28連隊	龍山			第1・第2中隊		
		野砲兵第26連隊	龍山		第1～第3大隊	第1～第2・第4～第5・第7～第8中隊	高射砲隊	
		馬山重砲兵大隊	馬山			第1～第2中隊		
		工兵第20大隊	龍山			第1～第2中隊		
		飛行第6連隊	龍山			第1～第3中隊		材料廠
		衛戍病院	龍山・平壤・大邱					
朝鮮憲兵隊司令部	京城	京城憲兵隊						
		大邱憲兵隊						
		平壤憲兵隊						
		咸興憲兵隊						
		羅南憲兵隊						
軍馬補充部雄基支部 陸軍造兵廠平壤兵器製造所 陸軍兵器本廠平壤出張所 築城部鎮海灣支部 陸軍運輸部釜山出張所	雄基 平壤 平壤 鎮海 釜山							

出所：「在鮮陸軍將兵同相当官高等文官職員録」（昭和6年4月15日現在）（C13070911800-C13070911900）

る。総額は、31年12月分から32年7月分までは、1月を除いて1カ月当たり1～6万円であるが、同年8月分からは毎年10万円、12月・33年1月では1カ月17万円と増加している。またその32年度の総額は117万円（資料の欠落している33年2・3月分を32年12月・33年1月分の32万1千円として加算し1年分を計算した）。

その内訳をみると、31年12月分と32年1月分<sup>(8)</sup>の大部分は運輸費であり、前者が、混成第4旅団、20師団補充隊、関東軍飛行隊、関東軍自動車隊の輸送費5万7332円と龍山から羅南（第19師団衛戍地）までの弾薬輸送費801円の計5万8133円、後者が、第2師団下士候補者、関東軍鉄道班員、第2師団第2次

表7 混成第38旅団編成表

旅団司令部				
歩兵第73連隊	連隊本部	第1大隊	第1～第3中隊	機関銃隊
		第2大隊	第5～第7中隊	機関銃隊
歩兵第76連隊	連隊本部	第1大隊	第1～第3中隊	機関銃隊
		第2大隊	第5～第7中隊	機関銃隊
		第3大隊	第9～第11中隊	機関銃隊
騎兵第27連隊	連隊本部		第1中隊	機関銃隊
野砲兵第25連隊	大隊本部		第4～第6中隊	
工兵第19大隊	大隊本部		中隊	
衛生班				
通信隊				

出所：「混成第38旅団将校同相当官職員表」（C13070938200）

表8 混成第39旅団編成表

旅団司令部				
歩兵第77連隊	連隊本部	第2・第3大隊	第5～第7・第9～第11中隊	
歩兵第78連隊	連隊本部	第1～第3大隊	第1～第3・第5～第7・第9～第11中隊	
騎兵第28連隊			第2中隊	
野砲兵第26連隊		第2・第3大隊	第4～第5・第7～第8中隊	

出所：「混成第39旅団将校同相当官職員表」（C13070938900）

表9 朝鮮軍の満州事件費

(円)

	31年12月分	32年1月分	4・5月分	6・7月分	8・9月分	10・11月分	12月・33年1月分
俸給	-	-	12,021 (19.2)	10,933 (29.0)	-	-	-
需品費	201 (0.3)	156 (0.1)	1,597 (2.6)	1,614 (4.3)	3,918 (1.8)	10,371 (5.0)	4,416 (1.4)
郵便電信費	980 (1.5)	1,540 (1.1)	3,298 (5.3)	3,785 (10.1)	2,804 (1.3)	460 (0.2)	2,700 (0.8)
糧秣費	1,109 (1.7)	8,455 (13.5)	9,987 (26.5)	178,953 (81.5)	104,836 (50.6)	255,063 (79.3)	-
被服費	-	-	-	-	672 (0.3)	393 (0.2)	650 (0.2)
兵器費	61 (0.1)	42 (0.0)	90 (0.1)	800 (2.1)	1,800 (0.8)	2,707 (1.3)	-
馬匹費	80 (0.1)	-	447 (0.7)	240 (0.6)	600 (0.3)	670 (0.3)	733 (0.2)
演習費	-	-	-	-	-	-	-
患者費	-	-	2,355 (3.8)	776 (2.1)	3,947 (1.8)	2,088 (1.0)	2,649 (0.8)
運輸費	58,284 (90.7)	130,578 (90.4)	17,867 (28.5)	5,283 (14.0)	13,174 (6.0)	73,230 (35.3)	45,071 (14.0)
築造費	-	-	-	-	-	-	100 (0.0)
旅費	2,943 (4.6)	2,724 (1.9)	5,123 (8.2)	3,135 (8.3)	5,714 (2.6)	2,017 (1.0)	4,601 (1.4)
備給	130 (0.2)	5,195 (3.6)	1,273 (2.0)	1,067 (2.8)	4,440 (2.0)	4,251 (2.1)	3,283 (1.0)
諸手当	-	-	6,923 (11.1)	1,895 (5.0)	2,380 (1.1)	2,440 (1.2)	1,035 (0.3)
接待費	-	-	1,740 (2.8)	-	-	910 (0.4)	-
雑費	633 (0.1)	4,274 (3.0)	2,407 (3.8)	135 (0.4)	1,203 (0.5)	2,986 (1.4)	1,491 (0.5)
計	64,274 (100.0)	144,511 (100.0)	62,606 (100.0)	37,649 (100.0)	219,605 (100.0)	207,359 (100.0)	321,792 (100.0)

出所：31年12月分・32年1月分＝「満州事変に関する経費使用方の件」(C04011107600・C04011138800)，4・5月分＝「満州事変費使用方の件」(C04011250400・C04011297000・C04011295700)

6・7月分＝C04011425800，8・9月分＝C04011404200・C0401140690)，10・11月分＝C04011463800，12・33年1月分＝C04011489400

(備考)

4・5月分には追加分を含む。8・9月分には8月分の臨時費を含む。

補充兵、関東軍独立守備隊要員、第10師団(姫路)兵制部隊等の釜山駅から奉天駅までの鉄道輸送費5万4664円、貨物自動車輸送班及び運転手助手の平壤及び新義州駅から奉天駅までの輸送費4174円、混成第28旅団の羅南駅から安東駅までの鉄道輸送費7万1725円、及び患者用被服手荷物輸送費15円の計13万578円であった。

その後、4～7月になると、運輸費の他に俸給や糧秣費も計上され、8月以降は糧秣費が大部分となる。そのうち、32年12月・33年1月分の糧秣費25万5063円では、朝鮮陸軍倉庫への精米、燕麦、精麦、副食物、味噌、醤油、清酒等の追送分25万1318円<sup>(9)</sup>でそのほとんどを占めた。

次に、第20師団の満州派遣から帰還までの動向を見よう<sup>(10)</sup>。同師団司令部は、31年12月29日に奉天に到着した。当時、張学良軍は錦州付近に集結しており、関東軍は營口及び奉天線(奉天－山海関)に沿って進撃中の第2師団、満州事変勃発直後に「独断越境」した混成第39旅団、及び混成第38旅団を錦州に向わせ、翌32年1月3日、39旅団は徒歩で、師団司令部及び38旅団は鉄道輸送で錦州に到

着、同地を占領した。

ちなみに、関東軍は錦州占領後の各部隊の配置は以下のように定めた<sup>(11)</sup>。第2師団(歩兵第3旅団欠)：鉄嶺以南の遼東地方、歩兵第3旅団(39連隊欠)及び混成第4旅団：吉長警備隊、第38旅団：錦西県以西、第39旅団：第8旅団が担当する黒山・喜安以東の遼西地方と38旅団が担当する錦西県以西の中間区域(第20師団司令部は錦州に置かれた)。

当師団は錦州占領と同時に新たに混成第8旅団を指揮下に入れ、同月中旬から3旅団体制で中国軍の討伐を開始、まず38旅団を錦西県に向かわせてこれを掃蕩、下旬には師団の主力を北鎮、黒山両県に投入して抗日軍と戦火を交えた。

2月3日、混成第38旅団は20師団の指揮を離れて北満州に向い、新たに于芷山軍を師団の指揮下に置いて台安、盤山両県の治安の回復を図った。その後、師団各部隊は遼西西部のそれぞれの警備地区で1月以来60回以上の戦火を交えた。また師団は、直接的な武力討伐だけでなく、「遼西各県連絡合同建国促進運動大会」を指導し、満州国の建国を支援した。



その後、師団司令部は第8師団（弘前）と交代して4月27日に、混成第39旅団の主力は5月1日、その他一部部隊は5月11日にその編成地に帰還した。派遣から帰還までの戦死者は100名余り、負傷者は約100名であった。

このように錦州占領は第38、第39の両混成旅団によって行なわれたが、このうち事変勃発と同時に越境出動した混成第39旅団（第19師団所属）の行動は以下のものであった<sup>(12)</sup>。

9月19日に関東軍が奉天付近の掃討を終えると、同軍はその主力を長春方面に移動させ、吉林への作戦を展開したため奉天付近の兵力が手薄になった。このため朝鮮軍司令官・林銑十郎は、9月21日、関東軍を増援するために事変直後から新義州に待機していた混成第39旅団に越境出動を命じた。同旅団は同日夜奉天に到着し、近郊の鄭家屯や新民付近に出動して張学良軍の掃討と治安維持に従事した<sup>(13)</sup>。当時の同旅団の装備は、軽機166挺、重機32挺、擲弾筒45挺、曳火手榴弾1500発、平射歩兵砲4門、曲射歩兵砲4門、軽迫撃砲8門、中迫撃砲4門、野砲16門であった<sup>(14)</sup>。

11月下旬には、嫩江河畔大興付近の馬占山軍を追撃するために同旅団から「嫩江支隊」が組織されて同軍を撃退したが、諸事情によって国境付近まで深く追撃することは避けたので、馬軍は齊々哈爾近郊の昂々溪付近に陣地を構えて抵抗した。このため39旅団は関東軍の指揮を受けて第2師団の多門師団長の指揮下に同師団の残余部隊と嫩江支隊とともに馬軍の機先を制して11月17日に進撃、19日に齊々哈爾を占領した。

この嫩江と昂々溪の戦闘と前後して、張学良軍は正規軍と義勇軍によって馬軍と呼応して満鉄沿線に攻勢を強めたので、同旅団は関東軍の命令を受けて11月27日に第2師団の主力とともに齊々哈爾から奉天に移動し、北寧線上を進撃したが錦州攻撃にまでは至らなかった。その後、同旅団は12月21日に奉天付近の法庫門、昌図付近で関東軍独立守備隊と

ともに抗日軍を撃退して原駐地に帰還した。続いて12月下旬には錦州攻撃に備えて北寧線沿線を前進し、32年1月3日に錦州を占領した。

錦州占領後の1月7日、第77連隊（平壤）の主力は義州に進撃して同地を占領した。また旅団は錦州、義州、溝帮子、盤山付近を占拠して治安維持に当たるとともに、1月11日には天津に派遣されていた第77連隊の一部が山海関を経て原隊に復帰した。

32年4月6日、関東軍は在満日本軍の改編整理に着手し、同旅団は第20師団司令部とともに朝鮮の各衛戍地に帰還することになり、遼西地区、特に通遼付近の討伐終了後の5月11日に部隊全てが帰還した。そしてこれに代わって第8師団と第10師団が渡満した。

次に、同じく朝鮮軍の指揮下にあり、第19師団から抽出された混成第38旅団の満州派遣から帰還までの行動は以下のものであった<sup>(15)</sup>。同旅団は1931年12月27日に編成及び出動の命令を受け、31日に奉天に集結して第20師団長の指揮下に入った。そして翌1月3日の錦州占領に加わり、その後直ちに中国軍の敗残兵と交戦してその殆どを掃討した。

同年4月下旬に第39旅団が第8師団と交代で編成地に帰還したのに対し、同旅団は北満に移動し、4月28日に旅団の主力は哈爾濱に集結、第10師団の指揮下に入った。そして歩兵第8旅団に代わって兵力を逐次東支鉄道東部沿線に配置し、5月2日海林に到着した旅団主力は反吉林軍を掃討する任務を負った。

このように、第38旅団は牡丹江駅付近の海林で反吉林軍と対峙しながら牡丹江左岸の治安維持に当たった。この間、旅団の一部である歩兵第73連隊を基幹とする1支隊は吉敦線によって敦化に進み、敦化—寧安道の構築に当たった。

同旅団は、5月28日に上海事変の戦闘を終えてから満州に移動した第14師団（宇都宮）の指揮下に入り、掖河付近の敵軍をソ満国境

表10 第20師団「満州事件費」

(円)

	1932年3月分	4月分	5月分	8・9月分	10・11月分	12月・33年1月分
俸給	-	27,800	29,205	-	-	-
需品費	26,601	16,670	6,301	14,535	29,262	31,210
郵便電信費	1,741	2,375	2,520	4,250	4,075	4,790
糧秣費	68,498	64,380	19,252	26,758	50,616	38,145
被服費	740	760	250	2,280	1,619	2,134
兵器費	510	3,259	382	5,665	15,649	-
馬匹費	1,053	510	200	225	-	-
演習費	-	-	5,070	-	-	-
患者費	2,691	1,335	1,575	7,374	2,635	2,308
運輸費	26,381	12,062	5,650	75,900	24,445	21,350
築造費	5,125	4,247	555	-	-	11,520
旅費	1,330	4,517	1,567	10,830	8,251	6,198
備給	17,538	16,438	7,332	9,471	9,468	8,795
諸手当	-	-	-	-	670	4,900
接待費	-	2,200	-	900	700	-
雑費	12,393	9,640	3,747	3,768	5,719	5,650
計	164,604	166,195	84,114	161,956	153,109	137,000

出所：32年3月分=C04011200500,C04011187400、4月分=C04011262500,C04011255700,C04011249900、  
C04011278400、5月分=C04011295600C04011296500、8・9月分=C04011405200、10・11月分=C04011440200、  
12月・33年1月分=C04011490000

表11 第20師団 糧秣費内訳 (1932年3月分)

(円)

司令部	将校以下請負賄・夜食料	14,071
野戦倉庫	卵・砂糖・塩・麦粉・薪・ 賄料・加給品代	1,483
兵站支部	請負賄・加給品代	3,311
39旅団司令部	請負賄・加給品代・増給	2,420
歩兵第77連隊第2・第3大隊	賄料・加給品代・増給	13,275
歩兵第78連隊第1～第3大隊	賄料・加給品代・増給	21,020
騎兵第28連隊第2中隊	賄料・加給品代・増給	1,770
野砲兵第26連隊第2・第3大隊	賄料・加給品代・増給	7,446
工兵第26大隊	賄料・加給品代・増給	2,212
通信隊	賄料・加給品代・増給	697
救護班	賄料・加給品代	792
計		68,497

出所：C04011200500,C0401118740

にまで追い詰めて寧安付近の治安を確保した。この際、旅団は遼河西岸での治安維持の経験を踏まえて、小中学校の開講、橋梁の架設、道路の改築、自治の促進など社会的インフラの整備を行なって人心の慰撫に努めた。

9月初旬には、関東軍の命令で配備を変更したのち、間島経由で帰還命令を受けて歩兵第8旅団と交代して敦化の一部部隊は敦化－局市街街道を、旅団主力は寧安－老爺嶺－局市街街道を経て一部は10月2日、主力は10月13日にそれぞれ編成地に帰還した。

このような各旅団の行動を押えながら、第19及び第20師団の満州事件費の内訳を検討しよう。まず、第20師団の同費を見たのが表10である。この場合、第20師団から編成された

表12 第20師団 運輸費 (1932年3月分)

(円)

司令部	借上乗用車・貨物自動車賃	2,619
野戦倉庫	貨物自動車借上賃・荷馬車借上賃・縄	2,555
錦州兵站支部	荷馬車借上賃	30
39旅団司令部	荷馬車借上賃	150
77連隊第2・第3大隊	荷馬車借上賃・薬縄	6,695
78連隊第1～第3大隊	荷馬車借上賃・貨物自動車借上賃・薬縄	7,855
騎兵第28連隊	荷馬車借上賃	620
野砲兵第26連隊第2・第3大隊	荷馬車借上賃・薬縄	4,102
工兵第26大隊第1中隊	荷馬車借上賃・貨物自動車借上賃	1,377
通信隊	荷馬車借上賃・薬縄	254
救護班	荷馬車借上賃	124
計		26,381

出所：C04011200500,C0401118740

旅団には混成第39旅団があり(表8)、この旅団の満州事件費が表10に含まれているかどうかは判然としない。

同表によれば、第20師団は32年5月に帰還するまで毎月約16～17万円、また帰還してからも8月～11月まで毎月7～8万円の事件費を支出している。同師団は31年12月に出動して1月3日の錦州占領に加わり、その後は錦州に司令部を置いて5月に帰還したようであるから、同表の3月～5月分が同地方の治安維持経費といってよからう。全体として糧秣費と運輸費、そして備給の比率が高くなっている。

このうち、32年3月分について、糧秣費と運輸費の内訳をみたのが表11と表12である。

「満州事件費」はどのように使われたか(2)

表13 第19師団 満州事件費

(円)

	1932年3月分	4・5月分(A)	4月分(A)	4月分(B)	5月分	4・5月分(B)	5・6・7月分	8・9月分(A)	8・9月分(B)	10・11月分	12・1933年1月分	8-11月分	1933年2-3月分	1934年度
俸給	-	-	38,000	4,100	-	78,746	-	-	-	-	-	-	-	-
需品費	332	243	4,300	200	711	15,908	3,765	20,273	-	34,075	26,221	418	32,775	9,899
郵便電信費	186	528	1,500	100	-	5,645	990	4,147	-	3,358	2,618	16	5,535	3,221
糧秣費	-	28	21,500	1,800	-	63,458	6,370	75,497	-	73,457	71,127	397	67,143	60,738
被服費	248	-	1,500	-	-	2,726	-	4,039	-	2,520	1,838	-	3,453	2,353
兵器費	-	-	750	-	-	3,588	530	6,239	-	8,446	8,955	-	14,881	11,963
馬匹費	-	500	450	100	-	1,216	500	890	-	670	730	-	402	9,921
演習費	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	0	3,000
患者費	97	171	500	150	-	7,274	-	4,596	-	2,835	1,787	-	1,564	2,097
運輸費	618	7	3,500	500	2,637	31,982	11,738	49,298	-	47,015	27,430	272	25,068	26,981
築造費	-	-	100	-	561	5,625	800	4,453	-	4,580	10,766	-	3,638	14,821
旅費	825	2,509	1,000	-	8,445	2,414	631	-	9,246	12,892	11,836	386	11,882	14,801
備給	40	318	1,040	300	3,330	10,569	-	19,106	-	15,666	16,133	136	19,421	7,976
諸手当	-	225	17,640	1,860	2,730	23,590	1,060	-	3,792	2,567	1,027	370	2,915	-
接待費	-	-	-	-	-	2,000	-	-	2,250	800	800	-	-	600
雑費	179	623	4,000	4,650	1,198	27,034	5,300	12,332	-	7,332	10,417	717	15,018	7,451
計	2,527	5,154	95,780	13,760	19,613	281,779	32,485	200,876	15,288	216,213	191,690	2,715	203,702	175,817

出所：第19師団「満州事件費使用方の件」(1932年3月分=C04011202600, 4・5月分(A)=C04011261100, 4月分(A)=C04011256200, 4月分(B)=C04011256900, 5月分=C04011300500, 4・5月分(B)=C04011419000, 5・6・7月分=C04011349100, 8・9月分(A)=C0401140570, 8・9月分(B)=C04011405600, 10-11月分=C04011464000, 12-1月分=C04011536200, 8-11月分=C04011402400, 1933年2・3月分=C04011573300, 1934年度=C04012031300)

(備考)

- ①1932年3月分及び4・5月分(A)は、混成第38旅団の満州出動に伴う経費
- ②同年4月分(A)は、4月3日からの間島出動、(B)は第73連隊茂山守備隊の間島派遣に要した経費
- ③同年5月分は、間島臨時派遣隊及び混成第38旅団の出動に伴う経費
- ④同年4・5月分(B)は、間島・琿春地方への臨時派遣隊の所要経費
- ⑤同年5・6・7月分は、5月23日慶源守備隊の琿春への臨時増派に伴う当該月経費
- ⑥同年8・9月分(A)は、混成第38旅団及び間島・琿春・長白各派遣、(B)は、混成第38旅団及び間島臨時派遣隊等の出動に伴う経費
- ⑦同年8-11月分2,715円は、会寧歩兵第75連隊派遣に関わる上三峯守備隊の経費
- ⑧1933年2・3月分は、間島・琿春・長白派遣隊の経費
- ⑨1934年度には、同師団間島臨時派遣隊琿春支隊が、関東軍第2独立守備隊と連携して行なった同年9月から翌35年10月に渡る琿春地区特別治安工作(総経費14,034円)のうち、1934年度所要額8,815円を含む。

表14 第19師団 糧秣費内訳 (1932年4・5月分)

(円)

司令部	請負賄食事代・缶詰代等	4,867
第74連隊	賄料・加給品・増給	11,510
75連隊	賄料・加給品・増給・食料・キャラメル・ミルク	12,811
野砲兵第25連隊	詰切食糧・弁当代・加給品	209
工兵第19大隊	弁当・副食物	103
衛戍病院	主食代・副食代・詰起居残食料	2,381
間島臨時派遣隊	賄料・加給品・増給	25,832
琿春派遣隊	賄料・請負賄・増給・加給	5,740
計		63,453

出所：C04011419000

糧秣費では、請負賄、賄料、加給品代、増給がほとんどであり、先に見た第2師団と同じような支出項目が並んでいる。運輸費でも荷馬車、乗用車、貨物自動車等の車両借上代が大部分を占めていて、これも第2師団の支出と同じであるが、事件費の総額は32年度(32年4月分～33年3月分、資料の欠けている32年6・7月分については5月分の8万4千円の倍額16万4千円を計上)は約92万円と第

表15 第19師団 運輸費内訳 (1932年4・5月分)

(円)

琿春臨時派遣隊	牛馬車・荷物車	10,800
間島臨時派遣隊	荷物車借上料	15,000
75連隊	自動車・船借上・牛車	309
鉄道守備隊	人馬・軌道費	1,450
兵器部	車両集配賃・貨車積卸料	206
計		27,765

出所：C04011419000

2師団の事件費総額286万円の約30%である。

最後に混成第38旅団の原隊である第19師団の事件費を見よう(表13)。同師団の事件費支出は、32年4・5月や8・9月分(A)、及び10・11月分のように約20万円が定額申請されている場合と、それ以外の臨時の支出では金額の開きが大きいのでその全体を把握するのが難しいが、これらをすべて合計すると32年度の総額は126万円となる(33年2・3月は32年12月・33年1月の19万1千円として加算)。

その内訳は、やはり糧秣費と運輸費が中心であり、経常費として総額28万円が計上されている32年4・5月分についてその内容をみると(表14, 表15)、糧秣費では賄料, 加給品, 増給が, 運輸費では荷物車や牛馬車の借上代がその大部分である。

## まとめ

1932(昭和7)年度の満州事件費は、予算総額1億8600万円にも上って日本財政を一挙に軍拡財政へと再編した。そのうち、関東軍が支出した事件費は推計で1800万円～6600万円である。この金額に本稿で推算した第2師団286万円, 朝鮮軍117万円, 第19師団126万円, 第20師団92万円の合計603万円を加えると2400万円～7200万円となる。

また、各軍の満州事件費は、賄費や請負賄費等の糧秣費と荷物車や自動車等の借上費, すなわち部隊の移動費用が大きな割合を占めていた。

満州事件費は、1932年3月に満州国が成立した後も継続して支出され、1933年5月の塘沽停戦協定までに第2・第19・第20師団の他に、第6・第8・第10・第14の各師団が満州に駐劄した。本稿や前稿で検討した各軍の他に、これらの師団が計上した満州事件費の用途をさらに検討する必要がある。

- (1) 「在満陸軍各部隊調 昭和6年10月大蔵省主計局調」(A08072188800)
- (2) 「昭和6年10月下旬 関東軍装備概況表 昭和6年11月16日 参謀本部第一課」(C12120037100) 477～479頁。ただし、騎兵連隊は、表1と表2によれば、満州と留守部隊に各1中隊が配備されていることになっている。
- (3) 日本側は、錦州占領以後32年4月までの期間にいわゆる「匪賊」を、(イ)張学良の「操縦」しつつあるもの約4万人 (イ)東北抗日義勇軍、(ロ)東北国民愛国軍、(ハ)東北抗日愛国軍、(ニ)熱河義勇軍、(ホ)大刀会、(ヘ)

紅槍会、(2)東支鉄道南部全体にわたり活動するもの約4万人、(3)吉林東部及び北部で活動するもの約1万2000人、(4)満州新政権に反対する各種集団約7万人と区分し、その総計を約12万人と把握していた(外務省亜細亜局第1課『昭和7年5月最近支那関係問題摘要(第62議会用) 満州事変関係(第1巻 満州状況)』(B13081222300), 50～51頁。

- (4) 以下の記述は、第2師団長・多門二郎の1933年1月21日付陸軍大臣・荒木貞夫宛の「上奏の件報告」(C04011543900)による。
- (5) 拙稿「『満州事件費』はどのように使われたか(1)」(『北星論集』第52巻第2号, 2013年)218頁の表3。
- (6) 「賄料定額指定ニ関スル件報告」(C04012513400)
- (7) 「時局の為特に要する経費使用の件」(C04011202400)
- (8) 12月分はC04011107600, 1月分はC04011138800。
- (9) C04011489400。
- (10) 以下は、第20師団長・室兼次の1932年6月16日付陸相荒木貞夫宛の「上奏書写提出の件報告」(C04011334500)による。
- (11) 前掲『最近支那関係問題摘要』, 10～11頁。
- (12) 「昭和7年5月12日陸軍省発表 第20師団司令部 混成第39旅団 作戦行動の概要」(A03023779400)
- (13) 9月の混成第39旅団に続いて、10月には第8師団からなる混成第4旅団が派遣された。同旅団は、歩兵第5連隊(青森)第3大隊, 歩兵第31連隊(弘前)第2大隊, 歩兵第17連隊(秋田)第3大隊, 歩兵第32連隊(山形)第2大隊, 騎兵第8連隊, 野砲兵第8連隊第1大隊, 通信隊, 衛生班の各部隊からなっていた。「混成第4旅団職員表 昭和6年12月25日調」(C13070937100)
- (14) 前掲「関東軍装備概況表」482～483頁。なお、この集計でも38式歩兵銃や軍刀, 弾薬は入っていないが、満州事変以前の1931年3月には、関東軍及び第2・第19・第20の各師団に38式歩兵銃がそれぞれ280・280・480・480挺, 30年式銃剣が280・280・480・480振の「特別交換」が行なわれている。またその経費は陸軍省所管の「軍事費」中「兵器費」であった(「兵器特別交換ノ件」C01006463300)。

また同年7月には、第19, 第20師団の歩兵連隊定員増加部隊の応急用として第19師団(歩兵第73～76連隊)に32年式軍刀17振と30年式銃剣1009振が、第20師団(歩兵第77, 78連隊)に32年式軍刀16振, 30年式銃剣972振が

「特別支給」されている（「兵器特別支給ノ件」(C01006466900)）。

各軍はこれらの兵器を含めて戦闘を行なったのであり、故障や損傷、篡奪にあわなければ新規の兵器費は維持費と弾薬費のみとなる。本稿で検討した第2師団や朝鮮軍の満州事件費において、兵器費が極めて少額であるのは関東軍の兵器費に肩代わりされているからであろう。なお、1933（昭和8）年度から計上される「兵備改善費」は、在満兵力の充備費が一部あるが、ワシントン条約の改訂に備えた海軍費が主であり（小島経済研究所編『膨張財政の建設的役割』1934年）、満州事変による軍拡とは直接関係がない。

- (15) 以下は、歩兵第38旅団長・依田四郎の1933年1月23日付の「上奏書写」(04011544000)による。

